



TITLE:

一言・ふたこと 本館書庫拡大の思想

AUTHOR(S):

浜田, 啓介

CITATION:

浜田, 啓介. 一言・ふたこと 本館書庫拡大の思想. 静脩 1969, 6(1): 4-5

ISSUE DATE:

1969-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36523>

RIGHT:

大学図書館界の動き

第1回日米大学図書館会議開催さる

国立大学図書館協議会、公立大学図書館協議会、私立大学図書館協会の合同主催で、第1回日米大学図書館会議(The 1st Japan-U.S. Conference on Libraries Science in Higher Education)が、5月15日(木)から5月19日(月)まで東京プリンスホテルで開かれた。参加者は、米国側20余人、日本側国・公・私立あわせ260人程であった。議題は ①大学教育における大学図書館の役割および利用 ②図書館員の専門教育および人物交流 ③図書館活動の機械化等であった。戦後のわが国図書館の再建発展には米国図書館界の積極的な好意と協力を忘れることはできないのであるが、この日米大学図書館会議の開催は、これまで断続的・個別的にとどまっていた両国図書館の相互協力が組織的な交流の軌道に第一歩をふみ出すものとしてきわめて注目される。

特別講演会

3月末、「京都民俗志」の著者井上頼寿氏と、古活字版の研究等で知られる書誌学者川瀬一馬氏による二つの講演会が本館会議室で開かれ、いずれも得るところが大であった。

京都の習俗について 井上 頼寿氏

3月29日(土) 午後1時半～3時半

冠婚葬祭のうちもっとも伝統が残っている習俗は「葬」であるということで、講演は京都の葬式関係が中心となった。ひと言に仏式といっても神道その他の要素も混入されている等氏の深いご造詣に裏づけられたお話は大変興味深くうかがわれた。

五山版について 川瀬 一馬氏

3月31日(月) 午後2～4時

五山版は鎌倉・室町時代京都五山を中心に禅僧によって出版されたのであるが、氏が実見・確認されたものによると、禅籍が200部、異版100部を加えて300部位、漢籍が80数部で、この中刊記のあるのが120部位とのことである。その特長として、他の古版に比して補刻が多い、版式・字様が書いたとおり板下を彫るという日本版本の本流にひとり離れて、宋・元・明版の覆刻を土台としているため中国風に統一されていることなどがのべられた。

五山版についての氏の研究は今秋にもまとまって出版の予定とうかがったが、そうなれば、大屋徳城氏の南都版研究、水原堯栄氏の高野版研究、氏の古活字版研究等とあいまって、日本古版についての研究はひとわり網羅されることになり、非常に待ち遠しく思われる。

一言・ふたこと

本館書庫拡大の思想

浜 田 啓 介

私はこの二年程の間に、学内十の部局の図書室と、十五箇所の手庫のお世話になった。その歴訪が可能であったのは、附属図

書館の書名カードのお蔭である。私は、各部局・研究室の図書を網羅集中したこのカード群を、ここが総合大学である事の、随

一のメリットだと信じている。——かくて、分散している本を、歴訪して利用できるのは嬉しい。

しかし、反面、図書の集中保管の思想を、もっと見直してもよくはなからうか、近年、本館の書庫にあった本草学の文献群が、一つの部局の図書室に移管された。私はこういう分属主義の思想に批判的である。本館にある文学の本を文学科が、哲学の本を哲学科がと分けどりにならぬ事を切に希望する。

本館は、本の撰択購入主体であるべきではない。その事は各研究室に主として委ねられるのがけだし当然である。と同時に、本館は、資料化した書籍の保管には、一層大きな役割りを果たすべきだと思う。

私は、部局から本館の書庫に還流されてくる本があって然るべきだと思う。

本館にせよ部局にせよ、旧書庫とか仮書庫とか名付ける不便な処に、あるいは人がはさみ込まれそうな狭隘な書庫に、迷惑そうに堆積されている図書が存在する事は、大学にとってあまり名誉ではない。これらは、単に部局の書庫や研究室の書棚の拡張によって措置するだけでなく、本館の整然たる大書庫の中に、再分類上架される事によって、その生命を復活するという事も考えられるのではないか。研究室→部局→本館書庫という還流が果されるならば、資料

化した図書の中央集在化が漸進し、とかくに昏迷をつづけているところの、「部局書庫との関連における本館書庫の意義」は確立するであろう。

そのため、およびその他あらゆる事のためには、建築と人員との大予算が必要な事は論をまたない。二十年計画とやらがあるものならば、本館書庫の三倍増計画は是非とも盛り込まなければならない。

図書館では、ちょっとした改善も、直ちにラベルやカードの改訂に結びつくから、莫大な人手を要する事は外部の私にも想像できる。今の還流の思想にも、再分類という手順が必然的に随伴する。しかし、図書館経営の大要は整理学だ。それは、集中・網羅・分類・記述が完備して、始めて大学の中枢的臓器となり得るのである。本館のカード作成がいかにか手薄な人員でなされている事か。それは、その責務の大きさに比して、慄然とする程である。本館の職員は大幅に増す必要がある。さもなくば、大学の機能・水準はむしろ低下して行くであろう。そしてこれらの改善は、一に商議員の見識と努力とにかかっている。

理想的な研究室は、大書庫の中にこそあるべきだ。書庫の中に入ったまま、終日外に出ないで仕事ができるシステム、これが私の理想である。いかがなものだろうか。

(教養部助教授)

京大図書館の思い出

坂 上 英

中学生の頃から今日まで、よく利用させてもらった図書室、図書館は十指に余るが、その中で最もお世話になったものは京大図書館である。私が入学した昭和17年頃は、現在の図書館が工事中であったため閲覧室は法経四番教室の上にあった。当時、私は講義が終ってから夕食までの時間を図書館で過ごすことを日課のようにしていたが、これは寸陰を惜んで読書に励んだということではなく、唯単に、一度下宿に帰ってか

らあらためて学生食堂まで足を運ぶのが億劫であるということによるものであった。従って、図書館で過ごす時間は、休んだ講義のノートを埋めるために使ったり、閲覧室の書架に並んでいる全集ものなどを読んだり、また試験が近けば医学書などを読んだり、すごしたわけである。

どんな本をよんだか大方忘れてしまったが、ただ、一回生の頃、読んでいた解剖学の原書の図譜が、数ページにわたって切りと